

■第115回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 イザヤ書11・1~10

直前の章では、アッシリア帝国の傲慢と滅亡「レバノンの木々が切り倒される」(イザヤ書10・33-34)とあり、この箇所では、倒された切り株(裁きの後)から新しい芽(メシア)が出るとの希望に満ちた新時代の到来が預言されています。ダビデ王の父エッサイ(サム記上16・1)を「エッサイの株」と言い、ユダの民への希望は、ダビデ王家の血統から新しい王(メシア)を「芽」と表現し、新しい王が(イエス)生まれるのを「若枝」と言っています。(マタ1・1-17)「七つ靈」は、①知恵・判断②見抜く力③行動計画④勇気⑤主と交わる⑥主への畏敬⑦これらに「主の靈」がとどまるのを加えた靈のことです。外見や偏見によらず、神の靈で真実を見抜き「目に見える……裁かず」となり、貧しい者・虐げられた者の立場で「弱者のために正当に裁く」ことです。武力ではなく、「口の鞭」神の言葉で悪を打ち倒し、(黙示録19・15)神の言葉が偽りを裁き、「唇の勢いで……死に至らせ」ます。不正に屈せず、神の義の実現を「正義を帯びる」言い、敵対する被造物同士が平和に生きる姿を「狼は小羊と共に宿り…」と言い、罪と死が除かれた平和を「乳飲み子が毒蛇の穴に戯れる」と言っています。神が臨在する国を「聖なる山」と言い、神の知恵と愛が世界を満たすことを「水が海を覆う」と言います。救い主が到来するのが「その日」で、全ての民が一つの「旗印」を中心として集い、神の栄光と平和の国が実現するとの預言です。

●第2朗読 ローマへの手紙15・4~9

当時の教会では、ユダヤ人と異邦人の信徒間に対立があり、パウロは「互いに裁かず、受け入れなさい」(ローマ書14・13、15・7)と語ります。旧約の「忍耐と神の慰め」を悟らせるために、アブラハムの信仰(創世記15・1-20)、ヨブ記の慰め、出エジプト記の恵みの体験、詩編119編の慰めなどが「かつて書かれた事柄」です。神こそが「忍耐と慰めの源」出発点・供給源・希望の泉です。(2コリント1・3-4)他者を受け入れ、仕える姿勢は、(フィリピ書2・5-8、マルコ10・45)「イエスに倣い」ます。神の栄光を現すとの目的を一致させ「同じ思いを抱き」信徒は心を一致させ(ヨハネ17・21)「心を合わせ、声をそろえて」神への讃美で「父はたたえられます」互いを受け入れることにより、見える形にするのが「神の栄光」です。イエスは、罪人や弱者を分け隔てせずに受け入れ、(ルカ15、ローマ書5・8)信徒はこれに倣い、無条件に赦して受け入れます。イエスはまずユダヤ人(割礼者)に仕え、神の約束(創世記12・3)はイエスの誕生で成就させ、神の真実(イザヤ書55・11)を見る形にすることで確証ができ「神の真実」を表しました。こうして異邦人にも救いが及び「異邦人の中であなたをたたえ…」(詩編18・50、2サムエル記22・50)となり、全世界に普遍的な救いの輪の広がりをもたらしました。

●福音書朗読 マタイ3・1~12

この箇所は、イエスが来られる為の「救いの準備」の場面です。神は預言者マラキ以降、約400年間沈黙された後「メシアの道を備える者」として、洗礼者ヨハネを遣わします。彼の誕生は天使ガブリエルが予告をした後、(ルカ1・13)祈りと禁欲の生活を送ります。生き方の方向転換をして、神に立ち返ることが「悔い改め」です。神の支配が現れ、旧約から新約への「橋渡し」の言葉が「天の国は近づいた」です。王であるイエスを迎える靈的な準備が「荒れ野で叫ぶ者の声」(イザヤ書40・3)です。ヨハネの服装と食事は、預言者エリア(列王記下1・8)に倣い、彼の説教と清貧は人を惹きつけました。当時は律法違反が罪であり、この赦しは、犠牲や洗礼によると考えていました。ヨハネは、形式的な信仰に^{おちい}陥っているファリサイ派とサドカイ派の人が、洗礼のようすを見に來たので、「^{まむし}蝮の子ら」と叱責します。内面の変化から生まれる正義や慈しみなどの善行が「悔い改めの実」です。「父はアブラハム」とあるのは、救いは血統ではなく、信仰により与えられるとヨハネは説きます。神には創造力と主権があることから「石からでも……子を造る」と語り、信仰による善行を「良い実」と言っています。ヨハネは自らを「はしため」と告白しており、イエスの偉大さを語っています。「水の洗礼」は儀式で、「聖靈と火」による洗礼は、人に靈が宿って、罪は焼かれて清められ、神に喜ばれる者にされます。終末の審判では選別があり、良い実は新しい神の国に、殻は火で焼かれて滅ぼされると語られています。

著者 蒲池 明憲